

東京留学時代の洪命憲

波田野 節 子

Hong Myong-hi as a student in Tokyo

Setsuko HATANO

はじめに

洪命憲が日本に来たのは1906年だと推定される¹。その年に洪命憲は東洋商業学校の予科に入学し、よく年の春には大成中学に3年生に編入して3年間在籍した。この2つの学校は現在も存続している。東洋商業学校は東洋高等学校となって現在も同じ場所にあるし、大成中学は大成高等学校となって現在は三鷹市に移転している。筆者は1999から2001年度に文部省の研究費補助を受けて2つの学校の記録を調査しようとした。東洋高等学校はその時期にちょうど校舎新築中であったために資料が出せないという理由で協力が得られなかったが、大成高等学校の方は小柴校長先生が快く承諾してくださり、2001年3月に大成高等学校を訪問した。校長先生は、1912年の神田大火と1923年の関東大震災で学籍簿などの記録は焼失し、現在同高校に保管されている洪命憲の名前と住所が記された卒業生名簿は、震災後に関係者たちが記録と記憶を持ち寄って再作成したものだと説明してくれた。失望している筆者に、校長は同窓会会員名簿のほか『大成七十年史』『大成百年史』の2つの学校史を贈ってくれたが、このうち『大成七十年史』は非常に興味深い資料であった。創立70周年にあたる1967年に校長を務めていた岩下先生が、「あとになればなるほどわからなくなる旧制中学校時代、三崎町の時代を明らかにすること」²を目的に、ほとんど一人で編集

した学校史である。太平洋戦争の戦災で校舎が焼失した大成中学は、歴史と伝統のある三崎町を出て三鷹市に移転した。ご自身も三崎町校舎で学生時代を過ごした岩下校長はなんとか当時の記録を残そうと思い、むかしそこで学んだ卒業生たちの記憶を記録することを試みたのである。

洪命憲と同じ時期に同じ校舎で学生時代を送った人たちの回想は、その時代と場所の雰囲気を生き生きと伝えてくれた。とりわけ、洪命憲が1929年に書いた「自叙伝」に名前を上げた同級生が、この本の中で洪命憲のことを回想している一節を目にしたとき、筆者は感動を禁じえなかった。本稿では、この『大成七十年史』と、1929年に洪命憲が雑誌『三千里』創刊号および第2号に連載した「自叙伝」³を主な資料として、東京留学時代の洪命憲がどのような学生生活を送ったのかを考察してみたい。

1. 東洋商業学校補欠入学

明治の日本の学校は現在と同じく3学期制をとっており、年度は4月1日から翌年3月31日までであった。1学期は4月から、夏休みを挟んで2学期は9月から、そして冬休みを挟んで3学期が1月から始まる。

1906年に日本に来た洪命憲はまず東洋商業学校に籍を置いて編入学試験の準備をし、翌1907年4月に大成中学3年生に編入学した。ところで洪命憲が東洋商業学校に入学したのがいつで

あるかは、はっきりしていない。「自叙伝」には東洋商業学校予科2年生に「補欠入学」したとあるので、単純に読めば1906年の新学期から編入したように見えるが、この年に限って、特別の事情が存在していた。じつは東洋商業学校は洪命憲が入学した1906年の春に創立されたのである。学年構成は、本科3学年およびその前段階の予科が2学年であったが、創立初年度に予科では1学年と2学年でそれぞれ新入生を受け入れたので、創立の年でありながらすでに予科には2年生がいた。それゆえ、この年の4月に入学した予科2年生は「補欠入学」ではなく正規入学ということになる。「自叙伝」によれば、洪命憲は正規の入学試験ではなく「補欠入学」のための試験を受けているから、正規入学でなかったこともまた確かである。

それでは、洪命憲はいつ東洋商業学校に「補欠入学」したのだろうか。洪命憲が日本に来たのは1906年の春ころではないかと思われるので、9月の2学期からの編入では時間がありすぎる。そこで筆者は、洪命憲は1学期の途中で特別に試験を受けて編入したのではないかと推測する。この推定の根拠は、下宿の主人が「大成経営者」と同郷なので紹介してやると言ったのがきっかけで大成中学に行くことになったという「自叙伝」の一節である。中学校を物色している洪命憲に、下宿の主人が大成中学を紹介してやると言ったというのだ⁴。しかし、これは大成中学への紹介かどうかわからない。疑わしいふしがある。というのは、実際には洪命憲は東洋商業学校に入ったあと、「食べるときと寝るとき以外は教科書に没頭」⁵するという過酷な受験勉強をして大成中学校に合格している。つまり、彼は紹介とは関わりなく実力で中学校に編入学したのである。

それでは、下宿の主人の紹介は何に役立ったのだろうか。筆者は、東洋商業学校の正規入学試験に間に合わなかった洪命憲が、学期初めではないのに補欠入学させてもらうことに役立ったのではないかと推測している。もちろん正規の入学試験で大勢の学生が落第しているような状況ならば、たとえ同郷の知り合いの依頼があっても、「大成経営者」は追加の入学試験などは行なわないだろうし、そもそも下宿の主人も

よく知らない外国人少年のために頼みごとをするはずはない。入学した学生数が定員に満ちておらず、学生を確保する必要があったからこそ、このような便宜を図ってもらえたというのが筆者の推測である。実際、東洋商業学校の第1回卒業生の数から推察すると、創立当初の東洋商業学校は入学者が定員に達していなかった可能性が高い⁶。

洪命憲が「自叙伝」の中で「大成経営者」と書いている、下宿の主人の同郷者とは、1897(明治30)年に大成中学を創立した名古屋出身の教育事業家で、杉浦鋼太郎(1858~1942)という人物である。いろいろな教育事業をおこなっていた杉浦は、この2年前の1904年「東洋商業専門学校」という日本で最初の商業学校を創ったが、生徒集めに失敗して、1906年にはこの学校を整理し、かわりに「東洋商業学校」を設立した。2度目の失敗をおそれた杉浦は、生徒を集めるためにあちこちの知り合いに声をかけておいたと思われる。そして、紹介を受けた場合には受験に関しても便宜を供したのではないかと想像される。洪命憲が投宿した下宿の主人は、杉浦の依頼を受けて東洋商業学校に入学する生徒を探していたところに、韓国から来たばかりの洪命憲が中学を探していることを知り、渡りに船と思って大成中学を勧めながら準備のために東洋商業学校に入学するよう勧めたのではないかと推測するのである。

23年前に受けた東洋商業学校の補欠入学試験について、洪命憲は克明に記憶して「自叙伝」に書いている。それによると、歴史は「十字軍の原因および結果」と「孔子の略伝」の2問だったので孔子の略伝の方だけ答え、地理の問題2問のうち1問は「韓国13道の首府を列挙せよ」という洪命憲のための問題であり、博物の「棘皮動物の特徴を列挙せよ」という問題はまったく分からないのであらかじめ席を立とうとしたところ、試験官がひきとめて例でもいいから書けというので、「ハリネズミ」というとんでもない答えを書いて「首席合格」だったという。そのときの受験者は洪命憲も合わせて2名だったという。これはやはり、生徒を集めるための、形だけの試験の可能性が高い。

2. 大成中学の編入試験

以上から見て、下宿の主人の「紹介」は東洋商業学校への入学に関してであって、大成中学の入試とは無関係であったと思われる。大成中学は経営が軌道にのっていたし、編入試験は非常に競争率が高くて「紹介」が介入する余地はなかったはずである。杉浦が1897（明治30）年に創立した大成中学は、創立の当初はかなり程度が高かったというが、その後、東京府内に公立私立の中学校が多くなるにつれて相対的に地位が低下していき、洪命憲が入学するころには「中の上」クラスになっていた⁷。当時、東京の私立中学では、入学試験の倍率が1倍から2倍程度で極端に難しいことはなかった。ところが編入試験となると事情はまったく違っていた。

当時の中学校では生徒の10から20パーセントが落第するのが普通であり、そのほか経済、健康などさまざまな事情で中退するものが多かった。1908（明治41）年の統計によれば、府立中学生徒の10パーセント、私立中学生徒の25パーセントが学業半ばで退学している。また明治末から大正時代にかけての府立第三中学校の場合、入学した生徒が卒業できる比率は少ない年で22パーセント、多くて47パーセントという統計が残っている。たとえ中学に入学しても、学力のほかに資力と健康があってこそ卒業することができたのである。落第や中退で生じた欠員を補充するために、各学校では編入試験を実施して編入生を受け入れた。公立中学では編入生をほとんど受け入れなかったもので、地方から上京した若者は私塾で学びながら自分の程度に合った私立中学を受け、場合によっては編入学によって飛び級をしたりした。一例をあげると、洪命憲の4年先輩にあたる、ある第9回卒業生は、1905（明治38）年1月に東京中学3年生3学期に編入し、その年の秋に今度は大成中学5年生2学期に編入学して、その翌年の1906年3月に中学を卒業している。大成中学在籍はわずか半年、中学校在籍期間は全部で1年と3ヶ月である⁸。また洪命憲と同じ時期に日本留学していた李光洙も、飛び級をしている。1906年に大成中学に新入学した李光洙は7月に天道教の内紛で学資が途切れて退学と帰国を余儀なくされた。しかし翌1907年に国費留学生として再び

来日して、その年の秋に明治学院中学3年生2学期に編入した。1年飛び級したわけだ。李光洙の場合には3年間という期限付きの学費給付であるから、こうしなければ中学校が卒業できなかったためであろう。

大成中学では編入生にできるだけ門戸を開くのが校主の杉浦の方針であったという。そこには、財政上の問題もあったと推測される。編入試験の競争率はふつう非常に高かった。洪命憲が大成中学に編入した1907年の試験倍率は不明だが、その前後に編入試験を受けて入学した卒業生の回想から当時の事情をうかがうと以下の通りである。1905年5年生2学期の場合は11名欠員に対して受験者がなんと208名あった⁹。1911年4年生1学期の場合は17名欠員に対して100名ほどの志望者がいたという¹⁰。おそらく、洪命憲の時にもやはりこのように高い競争率だったのではないかと想像される。

こうした状況であるから、中学校の編入試験に同郷の知り合いの紹介などが役に立つとは考えられない。東洋商業学校入学後の洪命憲は、大成中学校に編入するために猛勉強を開始した。彼は東京に来る前に1902年から3年間ソウルの中橋義塾という新式教育を施す学校に通って、「日本語、算術、物理、歴史、法学などを含む多様な科目」¹¹を学び、常に主席だったという¹²。しかし今度の競争相手は、尋常小学校で義務教育4年と高等小学校で2年間学んだ上に中学校1、2年の教育に該当する知識をもつ日本の生徒たちである¹³。言葉のハンディもあるし、英語や理科などこれまで受けたことがない科目もある。洪命憲がいた東洋商業学校予科2年生のカリキュラムを見ると、算術が週4時間、英語が週6時間、理科が週2時間ある。だが、これでは不足だと考えたのだろう、洪命憲は「数学講習所」「英語講習所」に通っている。彼の下宿のある本郷区や東洋商業学校のある神田区には数学の研数学館、英語の正則英語学校など、数多くの私塾があった。そうした私塾に通うほかに、「鉱物植物の個人教授」まで受けて入試に備えた。

数学、理科、英語などを学ぶ洪命憲の脳裏には、おそらくその前年に起こったある事件があったことと想像される。2年前の1904年に日本

に派遣された韓国皇室留学生の事件である。彼らを受け入れて高等学校入学の準備をさせることになったのは当時最高水準の中学校である府立第一中学だった。ところが故国で近代教育を受けていない留学生たちは数学や理科の知識がないうえに、政治と法律への志向ばかり強いことに業を煮やした府立一中の校長が、朝鮮人には高等教育は無理だと新聞のインタビューで語り、記事に憤激した留学生たちが同盟休学をして、全員退学になったのである¹⁴。1905年末のことだ。校長のこの発言は当時日本に蔓延していたアジア蔑視の風潮を代表したものであり、とくに締結されたばかりの乙巳保護条約の正当性を強調したいマスコミの思惑も背景としてあったと思われる。しかし、実際問題として数学・理科などの教育を受けていない留学生が日本の学校に適應するのが至難であることを、洪命憲はこの事件で痛感したのではないだろうか。洪命憲自身もこの留学団に加わることを希望しながら家族の反対で挫折しているだけに、他人事でない思いがあったはずである。この韓国皇室留学生の1人であった崔南善は、最年少でありながら班長となり、学校生活に適應できない仲間と学校側の間に立って苦勞したあげく3ヶ月で帰国してしまったという。姜玲珠は洪命憲が崔南善を知ったのは、この翌年に崔南善が再来日したさいだと推定しているが¹⁵、それならまさに洪命憲が試験準備をしている頃である。洪命憲は崔南善の話を直接聞いたことだろうし、理科・数学の準備にいいよ熱心に取り組んだことであろう。もっとも、洪命憲はもとも自然科学の方面に進みたいと考えたほど科学に興味をもっていたから¹⁶、この勉強はそれほど苦痛にならなかったのかもしれない。

彼が中学校に入った目的は「日本語を徹底的に学んで、新学問を基礎から始める」¹⁷ことだったという。かれは「自叙伝」に、同国人には「明治の法科」か「早稲田の政経」に行けと勧めるものが多かったが、自分は「速成」するために苦勞する必要がなかったので中学校からやって行こうと決めたと書いている。自叙伝のこの記述からは、この頃の韓国人留学生には「明治の法科」と「早稲田の政経」に行って「速成」を目指すものが多かったことが窺われる。でき

るだけ早く学歴を得ること、それが「速成」である。1894年の甲午更張で科挙がなくなった韓国では、科挙のかわりに、外国で大学卒業の資格をとって帰国し、官界で出世しようとするものが増えていた。洪命憲が日本に来る前年の1905年から日本に来る私費留学生が急激に増えている¹⁸。息子が法律を勉強することを望んだという洪命憲の父も、最初はそのつもりで息子を日本に送り出したのだろう。

ところで同じ現象はもっと極端な形で中国にも見られた。洪命憲が使った「速成」という語は、この時期に中国で使われていた「速成教育」という言葉を念頭においていると思われる。日清戦争に負けたあとの中国では、1900年代初頭、近代化の一環として教育を近代化させるための「速成教育」が叫ばれ、これが科挙の代用としての留学現象を引き起こした¹⁹。1902年には二百数十名であった中国からの留学生は、科挙が廃止された1905年には実に1万人前後に膨れ上がった²⁰。洪命憲が日本に留学したのは、中国と韓国を初めとしてアジアの国々から留学生が大量に日本に押し寄せた時期であった。アジア留学生は出世のことばかり考えていたわけではない。短期間に近代化を成し遂げて清とロシアに勝利した日本で学ぶことで、自分たちの国を近代化させて独立を守りたいと考えたのである。ところが、清とロシアに勝利した当時の日本では、アジア軽視、アジア蔑視の風潮が非常に強まり、多くの留学生の自尊心を傷つけて日本への反感を募らせる事件が頻繁に起こった。先に述べた府立一中の校長のインタビューもその一つである。韓国と中国の留学生が出遭ったよく似た一例をあげると、1903年の大阪博覧会では中国館に纏足女性が見本にされて中国人学生を憤激させ²¹、1907年の東京博覧会では、朝鮮女性が見本にされたことに怒った韓国人学生が抗議し、結局、篤志家の協力を得て女性を帰国させたという事件が起こっている²²。また再留学した崔南善は、1907年3月に起こった早稲田大学の模擬国会事件²³に怒って学校をやめたとも言われている。この時期に仙台の医学校で学んだ魯迅は、のちに、忘れ得ない日本人恩師のことを「藤野先生」という小説の中で語っているが、その背景となっているのは他の教師

や日本人同級生たちが日常的に見せていた、いわれのない中国人蔑視だった。洪命憲もまた教室で嫌な思いをしたことを「自叙伝」に書き残している。

洪命憲が東京で過ごした4年間は、1905年の保護条約から1910年の日韓併合まで、すなわち韓国が独立を完全に失うまでの最後の期間である。日本国内では急速にアジア軽視の風潮が高まり、韓国においては国権が次つぎに奪われていった。そんな中、1907年の春に洪命憲は「好成绩」²⁴で大成中学3年生編入試験に合格し、3年間の中学生生活を始めたのである。

3. 大成中学の編入生たち

『大成七十年史』に寄せられた回想文の著者たちは、不思議なくらい編入生が多い。大成中学では編入生を重視する方針を取っていたと卒業生も回想しているが、その方針の結果がこの現象に現われているかのようである。洪命憲が在籍していた頃の大成中学の水準は、東京の中学校のなかでは「中の上」だったと先に書いたが、極度に高い競争率の試験を突破して入学してくる編入生たちは、一般学生に比べて非常に優秀だったようだ。自身も4年次編入したある第8回卒業生は次のように語っている。

「優劣の差がはなはだしく、特に変態入学者（正規の段階を踏まず、実力試験で編入学したもの—原注）の中には、抜群の秀才や豪傑がたくさんあった。しかも進級試験など眼中になく、もっぱら実力養成を主とし、教科書の勉強などは申しわけ程度で、高度の学習に余念がなかった」²⁵

大成中学時代の洪命憲の姿を彷彿とさせるような文章である。洪命憲は入学した最初の学期は「学校が怖くて教科書を熱心に復習」²⁶したが、その後は読書に没頭して学校も欠席がちになった。「出席が不正確なものは退学させるといふ校則があると生徒監から脅かされたこともあった」と「自叙伝」に書いている²⁷。しかし卒業生たちの回想を読むと、洪命憲の放恣ともいえる学生生活も、その実力のゆえに周囲はある程度認めていたのではないかと、また認める雰

囲気が当時的大成中学には存在していたのではないかと想像される。洪命憲は試験では常に一、二番であった。彼は「萬朝報」の優等生欄に写真入で紹介されたこと²⁸を「自叙伝」で語り、「大成経営者がひどく自分を褒めたようだ」と書いている²⁹。平生の生活態度を考慮せずに洪命憲を優等生として推戴した「大成経営者」の姿勢に、実力のある編入生の場合は生活の乱れも大目に見ようという姿勢が感じられる。

やはり編入生で、洪命憲より1年後輩にあたる第14回卒業生はこんな回想を残している。

「わが大成中学校は、この途中編入に広く門戸を開いていたので、四年、五年になると、下級学年とはうって変わり地方色がきわめて豊かとなっていたようである。いずれも郷里の中学校をあとにして上京した者どもであるから、どこか尋常一様でない一癖者が多かった。秀才もあれば努力型もあり、いわば野人の集まりであって、公立の中学校とはふんい気を異にした。」³⁰

この卒業生は4年次編入生であるから、彼にとっての上級生とは、彼が4年生に編入したときに5年生であった洪命憲の学年しかない。彼は同じ文章のなかで上級生について回想しながら、「上級学年には二十歳を越えた者もいて、中等学校とはいえ大人の学校のような感じもあった」と書いている。彼が思い浮かべているのは、当時21歳であった洪命憲ではなかっただろうか。

洪命憲は5年生2学期末で学校に行くのをやめてしまった。3学期はまったく出席せず試験も受けていないにもかかわらず、大成中学は洪命憲を卒業扱いにして卒業証書を送り、卒業生名簿に記載している。第7回卒業生の回想文によると、そのころ大成中学には「特別卒業」という制度があったという。卒業時には各科目の点数を記して成績順に卒業生の一覧を印刷するのだが、なかには特別に点数の記入がないままで卒業させることもあった。これが「特別卒業」である³¹。洪命憲もこの制度によって卒業扱いになったのだと推測される。余談だが、特別卒業のことをありがたく回想しているこの卒業生は一高を狙うつもりで大成中学に編入したのだ

が、遊び癖がとれず、最後はこの制度のおかげでようやく卒業することができたという。しかし、その後かれは猛勉強して京都帝大に進み、政治家になって衆議院議長までつとめている。

洪命憲が「自叙伝」に名前を上げている唯一人の日本人同級生も、編入生であった。

「4年生のときの学年試験で私をおさえて1位だった関沼某は現在医学博士としてかなりの名声を得ているというが、あまりぱっとしないその人物では、試験場で私のライバルになるには、実のところ少々不足であった」³²

ところが卒業名簿を見ると、洪命憲と同級の第13回卒業生の中に「関沼」という姓は見当たらない。「関」という人と「鯉沼」という人がいるので、洪命憲はこの2人を混合して記憶してしまったようである。該当するのは「鯉沼荊吾」という人物で、洪命憲より1年後の4年生から大成中学に編入学し、最終学年の5年生の時には級長をしていた。卒業後は一高から東京帝大に進んで医学博士になるというエリートコースを歩んでいる。ろくに勉強をしなくても鯉沼氏と席次を争い、「ライバルになるには不足」書いた洪命憲の優秀さがしのばれる。鯉沼氏も回想を書きながら洪命憲のことを思い出したのだろう。こう書いている。

「同級生に洪命憲^{マツ}という半島人がいた。たいへん成績の良い人で、特に記憶力がよく、いつも級の一番か二番を占めていた。南鮮か北鮮かわからないが、このごろどうしていることだろうか」³³

『大成七十年史』が刊行されたのは1967年、洪命憲はこの翌年に北朝鮮で亡くなっている。

ところで自叙伝には出てこないが、洪命憲が忘れ得なかった日本人同級生がもう一人いる。洪命憲が大成中学3年生に編入したとき同じクラスにいた生徒である。1935年に『朝鮮日報』に掲載した「大トルストイの人物と作品」の中で、洪命憲は、トルストイの「我宗教」をはじめさまざまな本を貸してくれた熱心なキリスト教徒の同級生として名前は出さぬまま回想して

いる。

「『我宗教』は人の本を借りて読んだが、本の持ち主の勧めで読んだ。その本の持ち主は私の同級生で転学して春園の同級生となった人物である」³⁴

その人、山崎俊夫(1891～1978)は盛岡で生まれ盛岡中学に進んだが、2年生のときに上京して大成中学に編入学し、1年後に編入してきた洪命憲と同級生になった。山崎は自著年譜に、「洪命憲という朝鮮人の生徒ともっとも親しく交際した」³⁵と書いている。彼らが同じクラスで学んだのは1年間だけで、4年生になる時、山崎は明治学院普通部に転学し、偶然にも今度は春園李光洙と同級生になった。李光洙とは文学を通じて付き合いが深かったようで、李光洙は回想記や日記に彼の名前を記している³⁶。

明治学院を卒業後、山崎は慶応義塾大学に入学して長井荷風に師事し、「三田文学」や「帝国文学」に特異な作風の小説を発表した。その中には明治学院を舞台に李光洙を实名(幼名李宝鏡)のまま主人公にした短編「耶蘇降誕祭前夜」もある。大学卒業後は文学から離れて忘れられた存在となってしまったが、最近、その特異な作風に注目したある出版社が作品集を刊行した³⁷。この中に収められたあるエッセーの中に、山崎が洪命憲を懐かしんで書いた一節がある。少し長いが引用する。

「同級生に洪命憲という名の朝鮮人がいた。色白の眉目秀麗な顔立ちだったので、君は朝鮮の李王家の親類かとわたしが尋ねたくらいだった。

洪君には別に友達もなく、またわたしもあまり交際家でなかったので、わたし達は何時のまにか無二の親友となってしまった。朝鮮からはるばる日本に留学してる位だから、かなり余裕のある家庭だったのだろう、猿楽町の彼の下宿に行くと、机の上には高価な新刊書がうず高く積まれてあって、貧乏学生のわたしなどは何時も洪君から借りて読むことになっていた。

トルストイ、松村介石、徳富蘆花、夏目漱石などに心酔していたわたしを揶揄しながら彼

は、思想的なもの、哲学的なもの、社会学的なものに傾倒してゆく傾向があった。(中略)

彼が帰郷したのは何時頃だったか、わたしはもう忘れてしまった。お互いに消息を断って何十年、ふと、ある日の新聞に彼の名が活字となって現われた。その記事によると、彼は北朝鮮の首班の一人として上げられていた。

私は信じられなかった。同名異人かも知れない。手紙を出してみようかとも考えたが、話して彼の手に届くかどうかは疑問だからあきらめた」³⁸

山崎俊夫は洪命憲と李光洙の2人と同級生になり、かつ2人とも親しくつきあった珍しい日本人である。

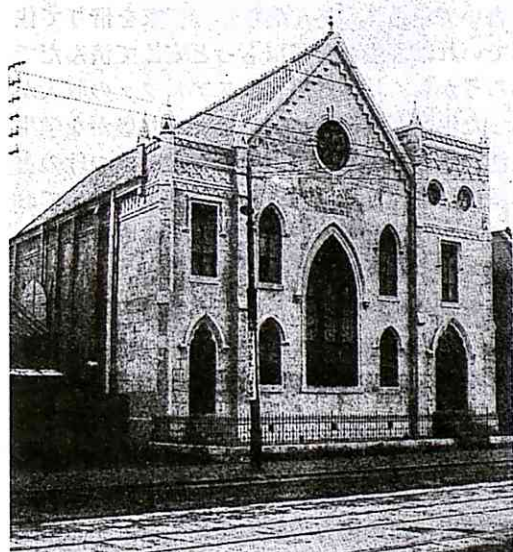
4. 洪命憲の東京生活

4-1. 学校生活

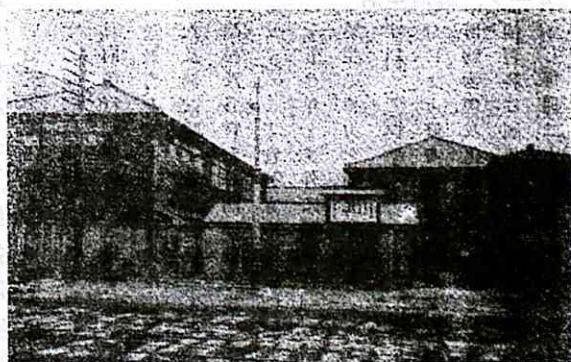
洪命憲は東洋商業学校を紹介してくれた主人の下宿に半年ほど滞在してから、仲間たちと家を借りて移り住んだと自叙伝に書いている³⁹。何人かの学生で共同して一軒家を借り、飯炊きの下女を一人雇って暮らすのは、留学生だけでなく地方から上京した日本人学生たちもよく取

る生活形式であった。山崎の回想にでてくる「猿楽町の下宿」というのが、おそらく共同生活の家のことであろう。当時の猿楽町は現在の西神田1丁目か猿楽町1あるいは2丁目で、大成中学のすぐ近くである。また最初の下宿については、李光洙がある座談会で洪命憲との出会いを回顧して、下宿は「本郷元町の玉真館」⁴⁰だったと語っている。明治末の元町は現在の文京区本郷1、2丁目で、現在その町名は消えてしまい、元町小学校や元町公園などにその名をとどめている。東洋商業学校と大成中学は神田区三崎町にあった。中央バプティスト教会のりっぱな石造りの会堂(写真①)の隣にある、木造二階の大きな瓦葺の建物が大成中学であった(写真②)。この周辺には学校や私塾が立ち並んでいるほか芝居小屋も多くあって、娯楽にもことかかない、活気にあふれた若者の町であった。現在もその活気は変わっていない。

東洋商業学校と大成中学は同じ杉浦の経営によるので、建物の裏手では敷地がつながっていて、同じ運動場を使用していた。運動場は民家に囲まれていて、朝体操をしていると味噌汁のにおいが漂ってくることもあったと、鯉沼氏が回想している。「大成七十年史」に収められている、そのころの体育授業で行っていた兵式体操の写真が、当時の運動場の面影と学生の姿を伝えている(写真③)。洪命憲がもし真面目に体育の時間に出席していたならば、東洋商業学校時代も大成中学時代もここで運動したこと

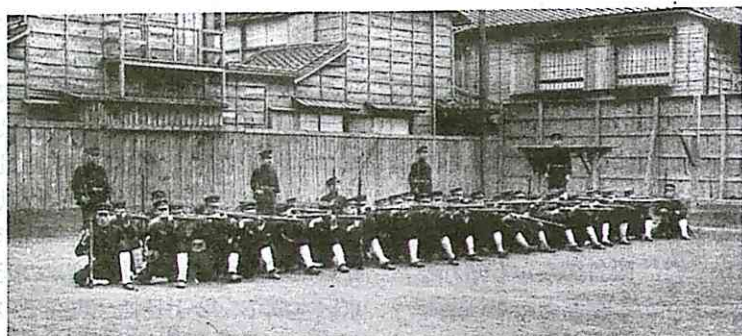


写真①：洪命憲が4年生の1908年11月に建てられ、1913年に神田大火で焼失した。会堂の右隣に大成中学校の屋根が見える



校 学 中 成 大

写真②：洪命憲が通っていたところの大成中学。
『帝国学校年鑑』(学校新聞社、1910年)所収



兵式体操（大正3年）

写真③：洪命憲が卒業して4年後の1914年の写真。この運動場は大火でも焼けなかった。民家に囲まれた運動場でゲートルを着用した学生たちが兵式体操をしている。

になる。

街中にあっただけに敷地は狭かった。そこに校舎がいくつも建てられて、昼は中学、夜は国語の私塾として有効利用されており、学校の右の門柱には「大成中学」、左の門柱には私塾の「国語伝習院」という札が下げられていた。門を入って右手の小さな建物には体操教師の生徒監督がいて、服装を点検したり遅刻者にお説教をしたりした。大成中学の生徒は白いゲートルを着用することが義務付けられていたので、おしゃれな学生は校門を出るとすぐにゲートルをはずしたと卒業生が回想している。洪命憲が学んだ校舎は、彼が卒業して3年後の大火事で焼失してしまった。

4-2. 経済生活

最後に洪命憲が東京で送った生活を経済的側面から見てみよう。

夏目漱石の有名な小説「坊ちゃん」の主人公は、1902（明治35）年に父の遺産を600円受け取り、それで3年間学ぼうと決心して物理学校に入った。200円で1年間勉強できるという計算である。3年後の1905年すなわち洪命憲が来日する前年にそこを卒業して、月給40円の「高給契約」で四国に赴任したが、上司と喧嘩して東京に戻り、今度は月給25円で東京市街鉄道の技手になった。それでも主人公は家賃が6円の一軒家を借りて婆やを引き取っている。つまり、この頃1年に200円あれば下宿して学ぶことができたし、ひと月25円あればつつましい社会生

活が営めたわけである。

洪命憲は、東京留学中は父親から月に25円の仕送りを受けていたほか、50円、100円ともらっていたので本を買う金には不自由しなかったと、ある対談で語っている⁴¹。東京では日露戦争後急速に下宿料が値上がりして、洪命憲がいた頃は9円から10円が相場になっていた。学校の月謝はほとんど上がりず、その頃の大成中学は3円くらい、参考までに李光洙が在籍していた明治学院普通部は2円50銭である。当時よく売っていた地方学生のための案内書も、東京の下宿学生はひと月に20円あれば楽に生活できると書いている⁴²。友人たちと一軒家を借りて住んでいれば、生活費用はもっと安く済んだであろうから、月に25円プラスアルファの収入があった洪命憲は、経済的にはかなり豊かな学生生活を送ったと言える。洪命憲の行きつけの古本屋は、彼のためにわざわざ発禁本を取っておいてくれたというが、それも洪命憲の金の払いっぱりが良かったからであろう。

話が少しそれるが、洪命憲が日本で本を読みあさった1908年から9年（明治41-2年）は日本文学史上記録的に発禁本が多い時期であった。発禁の種類は、自然主義作品がおもに対象とされた風俗壊乱のほかに、社会思想書の秩序紊乱があった。洪命憲は親しくなった本屋の主人のおかげで、この両方の類の発禁本を入手したようである。洪命憲が日本を離れた1910年には社会主義を弾圧するために捏造された大逆事件が起きているが、この年をピークにしてその翌年

には発禁本のほとんどが風俗素乱類となり、その翌年から始まる大正時代に入ると、発禁本の数自体が激減している⁴³。

おわりに

以上、洪命憲の「自叙伝」と「大成七十年史」を主な資料として、留学時代の洪命憲を取り巻いていた状況を考察してみた。

明治の末に洪命憲が過ごした東京留学の舞台は、現在の総武線の水道橋駅近辺である。(地図参照) 総武線の水道橋駅で後楽園が見える東口に出ると水道橋があり、その前の信号を渡ると右角に都立工芸高校の近代的な建物が立っている。そのあたりからが昔の元町である。神田川ぞいの道を登っていくと元町の名前を記念した元町公園がある。

次に、もう一度水道橋駅まで戻ってガードをくぐり線路の反対側に出れば、左手角に新築の高層建物がある。それがあの東洋商業学校の後身、東洋高等学校である。そこから神保町方面に数十メートル行くと、瀟洒な三崎町教会が立っている。そしてその隣にある無味乾燥な日本

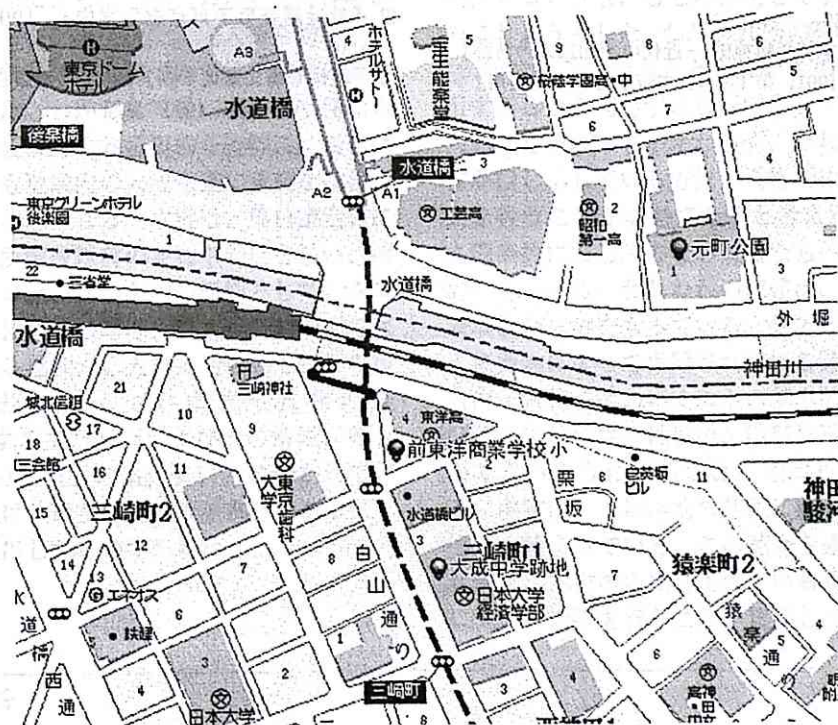
大学経済学部建物の敷地が、むかし明治の末に洪命憲が通った大成中学校があった場所である。

1909年2学期が終わるころ、洪命憲は本の読み過ぎで神経衰弱になり、3学期にはもうこの学校に通おうとしなくなっていた。彼の心を病んでいたのは過度の読書だけではなかった。すでに1909年7月に日本政府は韓国併合を閣議決定していた。10月に起こった安重根の伊藤博文狙撃事件は世論を悪化させて併合への動きを加速化し、12月には韓国で一進会が日韓合邦に関する請願書を提出した。東京の留学生たちはこうした閉塞状況の中で勉学意欲を失っていったのである。洪命憲は1910年2月に東京での留学生生活を終えて帰国した。4年間の東京生活だった。

*本稿は2003年10月4日に大韓民国忠清北道槐山で開催された第8回洪命憲文学祭において韓国語で講演した内容をまとめて日本語にしたものである。

*本研究は平成15～16年科学研究費基盤研究(C)補助を受けている。

現在の水道橋駅周辺



- 01 姜玲珠『洪命憲研究』(以下『研究』とする)、創作と批評社、1999、p.38
- 02 『大成七十年史』、『編集後記』、p.338
- 03 姜玲珠『碧初洪命憲의 <林巨正> 研究資料』(以下『資料』とする)所収、四季節社、1996
- 04 『資料』p.26
- 05 同上 p.27
- 06 波田野節子『洪命憲が東京で通った2つの学校—東洋商業学校と大成中学校—』1999~2001年度文部省科学研究費基盤研究B(1)研究成果報告書『朝鮮近代文学者と日本』、p.3
- 07 波田野『洪命憲が東京で通った2つの学校』、pp.4-5
- 08 『大成七十年史』pp.137-139
- 09 『大成七十年史』p.138
- 10 『大成七十年史』p.162
- 11 『研究』p.36
- 12 『資料』p.28
- 13 1907(明治40)年に小学校令により義務教育がそれまでの4年から6年に延びている。なお当時の中学校は尋常小学校4年のつぎの段階である高等小学校(4年までであった)2年生まで修了すれば入学できた。また修了証書の有無にかかわらず、試験に受ければ編入できた。
- 14 上垣外憲一『日本留学と革命運動』、東京大学出版会、1982、pp.133-136
- 15 『研究』p.54
- 16 洪命憲・薛貞植対談、『資料』p.213
- 17 同上
- 18 『研究』p.39
- 19 巖安生『日本留学精神史—近代中国知識人の軌跡』、岩波書店、1991、第1章<日本留学と「中体西用」>参照
- 20 同上p.64
- 21 同上第3章<「人類館」現象と「遊就館」体験>参照
- 22 『太極学報』第11号、1907.6
- 23 上垣外憲一『日本留学と革命運動』、p.140
- 24 『萬朝報』1909(明治42)年6月4日の優等生紹介欄に「好成绩にて合格し、現に5年生の首席を占め居れり」とある。
- 25 『大成七十年史』p.134
- 26 『資料』p.27
- 27 『資料』p.28
- 28 1909(明治42)年6月4日『萬朝報』に掲載されている。
- 29 『資料』p.30
- 30 『大成七十年史』p.146
- 31 『大成七十年史』p.130
- 32 『資料』pp.28-29
- 33 『大成七十年史』p.141
- 34 『資料』、p.83
- 35 『山崎俊夫作品集補巻2』、奢瀾都館、2002、p.216
- 36 1925年に『朝鮮文壇』第7号に掲載した「日記」、1936年に『朝光』4号に発表した「多難な半生の途程」、同年『朝鮮日報』に連載が始まった「彼の自叙伝」など。
- 37 『山崎俊夫作品集』全5巻、1986~2002、奢瀾都館
- 38 『山崎俊夫作品集補巻1』、奢瀾都館、1998、pp.111-112
- 39 『資料』p.26
- 40 「春園文壇生活20年を機会とする文壇回顧座談会」、『三千里』1943年11号、p.235
- 41 『資料』p.216
- 42 『最近調査男子東京遊学案内』、1909、博文館、p.501
- 43 「現代筆禍文獻大年表」1932(『斎藤昌三著作集第2巻』八潮書店、1980)参照